東由利町報

No.号外　昭和50年（1975）1月15日

発行　秋田県東由利町役場　印刷　KK本間印刷所

毎月1日発行（1部20円）昭和42年7月21日第3種郵便物認可

就労先が変ったら町にも連絡しよう

出かせぎの皆さんに毎月町報を送っていますが、一部に返送されるのがあります。就労先等の変った場合は必ず役場へ連絡ください。

消火栓に必ず標識を

消火栓には遠方からでも識別できる標識（旗）を取りつけ万一の火災と除雪による損傷防止につとめましょう。

本荘高校 下郷分校　今春から全日制に

創立から二十七年、本町の高校教育にかけがえのない恩恵をもたらして来た定時制課程の本荘高校下郷分校が、関係者の努力と地域の強い要望によって、その すぐれた実績を土台に昭和五十年度から全日制課程に移行されることになり、高校教育の場が拡充されたとして、町民を始め近隣市町村民から大きな期待を集めています。

本校同様三年で卒業

初年度の募集定員は45名

このたび全日制に移行が決まった本荘高校下郷分校は昭和五十年度の新入生から純然たる全日制課程となり、授業内容、授業時間等の一切が本校全日制と同等になり、当然のこととして修学年限も三年になります。

全日制移行に伴い、教師の増置や全日制としての機能を発揮させるための新たな配慮がなされることも予想されています。

なお、現在定時制課程で在学している生徒については、全日制移行と同時に調整の行なわれることも予想されていますが、履修教科単位の関係で、数年間は全日制と定時制の両課程が併置される形になるものと見られています。

昭和五十年度の入学生募集定員は一学級四十五名で、学力試験は従来どおり全県一斉の公立高校学力検査で実施されます。

入学後の経費は、授業料・生徒会費・PTA会費などの合計で月額約千七百円、教科書代などが年間で約四千円のほか、入学時には協力金として若干の支出を必要とすることになっています。

学力は本人の意志次第

出費月2万円以上も軽減

今春、中学校を卒業する長男を下郷分校へ入学させたいと希望していたAさんは、同校の全日制移行を歓迎して次のように語っています。

子どもたちは、定時制という言葉を聞いただけで毛嫌いする傾向にあったようです。というのは、①卒業が全日制高校より一年遅れること。②出校日以外に適切な仕事がなく若い身体をもて余し気味になること。③全日制より学力レベルが低い

全国大会出場歴もある卓球部

だろうとする懸念があったこと…等によるものだったと思われます。

正直なところ、わたしも子供の希望にあわせて本荘市の高校へ入学させたいと思ったのですが、バス代や下宿代などを計算してみると、月平均三万四五千円の出費は避けられず、家計の維持が難しくなるため家から通える地元の定時制高校を希望するよう仕向けていたものです。

全日制への移行願ったりかなったり

その下郷分校が、予想もしなかった全日制になると聞いて願ったりかなったりという気持でいっぱいです。

今後は下郷分校も三年で卒業できるし、本荘へ通学させることに比較すれば、食費を別にしても月々二万四五千円は出費が軽減されると思います。

学力の問題は、これまでの定時制でもすぐれた人たちがたくさん出ていると聞いていますし今後は毎日出校ということですから勉強にも自づと身が入り、要は本人の努力と意志次第でないかと思います……。

夢を与えて四半世紀

一丸となって発展へ地歩

昭和二十三年八月、旧下郷玉米両村の勤労青年にも高校教育の場を…として老方小学校に併設された下郷分校は、勉学の機会を求めつつ、満たされなかった当時の地域青年たちに大きな夢を与え、四半世紀の歴史を刻んで来ました。

間借りの校舎、不十分な施設設備での勉学をものともせず、同校初の卒業生は、十三人中六人までが大学に進学、同校今日へのゆるぎない第一歩を画しています。

以来二十七年、小学校併設から旧役場庁舎を改造した独立校舎への移転、さらに十年を経て現在地への新校舎建設・移転と、関係者と生徒が一丸となって数々の変遷に耐え発展への地歩を固め、施設設備の拡充につとめて現在にいたっています。

誇りと自負持ち中堅として活躍

同校はこれまで、四百七十九名の卒業生を社会に送り出していますが、いずれも勤労学生としての経験に誇りと自負を持ち、それぞれの場で中堅として活躍中といわれています。

しかし、近年の急激な経済成長は、純農村であった本町にも大きな変革をもたらし、中でも機械化に伴う農業の省力化が、働きつつ学ぶ勤労学生を対象とした昼間定時制高校の存在意義を失なわせつつありました。

こうした情勢をふまえ、学校当局および町当局、町議会は一体となって、数年前から数次にわたり同校の全日制移行を強力に県に働きかけていたもので、今回の決定は関係者を始めとする町挙げての努力が実を結んだものとも言えます。

珠算を学ぶこうした職業教育も同校の特色

揺るぎない実績

卒業生　多岐にわたる活躍分野

下郷分校

全日制移行の報に授業にも一段と熱がこもる。

定時制高校として険しく厳しい道を歩み続けて来た下郷分校…。その長かった軌跡はいま全日制という新たな軌道に連結され将来への発車を目前にしています。

ここで、険しかった過去の中に培かわれた下郷分校の実績の一部に目を点じてみたいと思います。

ニューヨーク舞台の若い建築技師も

まず四百七十九名の卒業生の進路ですが、家業でもある農業後継者の百三十人（27・6％）を筆頭に、商業サービス関係（14・4％）会社技術系（14％）団体等事務系（12・7％）公務関係（9・6％）その他（主婦、家事等を含む）と多種多岐にわたり、それぞれが社会の中堅になって活躍していると言われます。

これらの中には、独力で会社を設立、業界に幅広く敏腕を振っている人、一流会社に就職、外国留学をするなどして重要ポストにある人、年若くして国鉄の助役を勤めている人、渡米しニューヨークを舞台に建築技師として活躍している人など、数えるにあまたあります。

34人が大学へ

また、大学への進学にしても、文化系二十二名、理工系十二名を数え、定時制に学ぶ現役で東北大学農学部をパスした人、国立大一期校、同二期校の両方をいずれも合格した人など、すぐれた成績をあげた人たちもたくさん輩出し全日制高校に決して見劣りしないすぐれた実績をあげています。

在学中の実績にしても、スポーツ部門、文化部門を問わず、各種の全国大会へ出場、数多くの栄光の記録をも樹立し、県下に下郷分校の名を広めています。

このように、ゆるぎない実績を持つ下郷分校だけに、定時制課程から全日制課程に移行になったのも、一面からすれば当然の結果と言えなくもないことです。

町外からの照会も

分校という名でこそあれ、県立全日制高校への移行はこうした背景のもとに実現したものであり、決定と同時に早くも各方面から関心の目が注がれ、本荘市立石沢中、由利町立前郷中、羽後町立軽井沢中などから早くも照会が寄せられてもいます。

第17回全国高校生活体験発表大会で優勝

低い東中の進学率

全国平均を20％も下まわる

下郷分校の全日制移行を契機に東由利中学校の進学率の低さが新たな関心を呼んでいます。

中学校卒業生の進学率は年々向上し、昭和四十八年度の全国平均進学率は九〇・八パーセント（読読新聞社調）に達し、高校教育はもはや義務教育的になりつつあるとさえ言われています。

こうした情勢下にあって、東由利中の進学率（高校及び各種学校を含む）は、昭和四十五年度48パーセント、四十六年度54パーセント、四十七年度64パーセント、四十八年度69パーセントと年々向上はしているものの、全国平均をはるかに下まわっています。

県教育庁由利出張所の調査による四十九年度の本荘市由利郡内中卒者の進学率（見込）は、本荘市松ケ崎中や岩城町道川中の一〇〇パーセントを筆頭に管内平均で九一パーセントに達しているといわれています。

その中で東由利中は、七一パーセントと平均値を二〇パーセントも下まわり、鳥海村の直根中や百宅中の五〇パーセント台に次ぐ低いものであることが明らかにされています。

地理的条件とはいえ〝誇れない現実〟

この低い東中の進学率は、高校教育が普遍的、義務教育的なものとして認識されて来つつある最近の傾向からして決して誇ることのできない現実であると言えます。

他市町村に比較し、著じるしく低い東中の進学率については、近くに全日の高校がないという地理的条件から来る経済的な負担（通学交通費や下宿代等）の大きいことに起因するものと見られ、地元にある定時制高校については、修学年限が長いことなどを含めた前記Aさんの述べた理由等により、いきおい就職への道を選択することが最大の要因と考えられています。

特色ある校風を

決意を語る小松本荘高教頭

下郷分校創設時から地域の教育向上に情熱を燃やし尽力されて来た小松順之助本荘高校教頭（定時制課程）は、次のように語り、全日制移行に強い決意をのぞかせています。

◇

昼間定時制高校の置かれている現状からして全日制移行措置は遅きに失した感がないわけでもない。全日制移行後の下郷分校は、これまでに比較し高校としての内容が数段充実されることは疑う余地もなく、同時に学校の持つ責任も大きくなる。

いま産声を上げたばかりの全日制分校であり、当然幾多の困難も予想されるが、地域の要望や生徒の志向に応えながら将来を期待される人間教育の場として、その機能を十分果たせるよう全力をあげ取り組み、特色ある校風を生み出して行きたい。

＝高校進学＝絶対ではないが…

高校進学、高校卒という事象が一般社会における絶対でないのはもちろんであるにしても、十人中九人以上が進学し、高卒という今後の社会構造を考えるならば、進学に伴う一時の経済負担は、社会生活を営む上で避けることのできない陣痛であるとも言えそうです。

唯一の地元高校　みんなで伸ばそう

輝かしい多くの伝統と実績を礎石に、全日制高校として新たな軌道へ乗り出すことになった下郷分校、唯一の地元高校として独自の校風を築きあげれるよう、町民みんなが関心を持ち、より充実した高校に育てあげ伸ばして行きたいものです。

希望を無限に

下郷分校では、全日制移行を機会に、①定時制普通科としてあげて来たこれまでの成果をさらに高め、全日制高校としての学習内容を充実して行きたい。②自主性を伸ばす人間教育を重視し、実践活動や経験への取り組みを持たせて行きたい。③教育課程は純粋に普通科として考えて行くが生徒の志向を勘案し実態を見ながら女子コース、若干の職業教科の組み込みなども考慮して行きたい…と、全日制高校への希望を無限に広げています。